

同窓生
シリーズ

68



15回生

池辺晋一郎

いけべしんいちろう

◆プロフィール

1943年生。東京芸
大大学院修了。オペラ、交響曲、合唱曲、映画・TV・演劇音楽多数。著書多数。尾高賞2回、イタリア放送協会賞3回、日本アカデミー賞音楽賞8回、放送文化賞、紫綬褒章等。みらいホール館長、オペラシティ他の監督等。東京音楽大学教授。

実を言うと僕は、中学3年の時に東京芸大付属高校の願書を用意しかけていた。だが、結局は受けなかった。受けようと思いついたのが12月の終わりごろで、願書を見たら入試は何と1月末。これじゃとても間に合わない。やくめた！ で、志望を変更して新宿高へ。

もし芸大付高へ行っていたら、僕の人生はどうなっていたか……。今音楽をやっているのだから変わりないんじゃない？ と言われそうだが、それは違う。受けようと思ったのはクラリネットだったのだ。

このことが、新宿高入学後も関わってくる。クラリネットはやはり吹いていたい。新宿高にその種の部活はない。ならば、と当時朝日新聞社が全国展開していたジュニアオーケストラの東京本部教室なる所に、これはきちんと試験を受けて入った。入ってびつくり。周囲はみなうまいのだ！ それこそ芸大付高などの連中が来ている。

やくめた！ 日記にこう書いたな
—— 鶏口となるも牛後となるな
れ。

廊下に手製のポスターを張り、新宿高に「管弦楽愛好会」を設立。鶏口となつてクラリネット三昧だあ！
ところが、集まつたのはごちゃまぜ。ヴァイオリンやトランペットもいるが、オーボエやヴィオラなどはない。だがギターとウクレレが来た。クラリネットもうまいのが来た。もう仕方がない。モーツァルトやハイドンをオーボエなしのウクレレ入りに編曲。指揮もしなくては……。

ついにはここで、編曲のみならず勝手な作曲までして、学園祭などで演奏。まさしく「鶏口」を実践したのだった。あんなこと、もし芸大付高へ行っていたらやれたわけがない。

音楽好きは多かった。彼らは、2

年になる春に東京芸大受験を決めた僕をしきりに羨ましがった。あのころの年齢は、羨ましがられると反発する。そんな甘いものじゃないんだぞ、と知らしめたい。だから実際、猛烈な勢いで勉強した。あんな勉強、もし芸大付高へ行っていたらやれたわけがない。

でありながら、徹底的に遊んだのも新宿高時代。よき友に恵まれた。あれから半世紀近い時を経たが、実に広い分野にわたつて交遊が続いている。こんなこと、もし芸大付高へ行っていたらあり得たわけがない。

僕の原点は間違いなく、新宿高校だ。作曲家としての人生の出発地であり、人として育まれた大切な場所なのである。